

【レポート】島に嫁ぎ、子育てを終えて 食堂を開業

上天草市地域おこし協力隊／イターン 苔つぼみ 和宏

熊本県上天草市と長崎県島原半島の間、有明海のちょうど真ん中にボツンとある小さな離島・湯島。徒歩一時間で一周ができる人口三〇〇人ほどのこの島は、信号機もなければ車は乗用車二台と軽トラック一台だけで、あとは原付バイク。買い物は売店か農協。小学生七名に教職員九名、お巡りさんが常駐していなくとも、ほとんど皆が顔なじみの平和な島である。近年では、二〇〇匹ほどの猫が暮らすほのぼのとした猫島としても有名になってきており、ゆつたりとした島時間と猫に癒されに訪れる観光客も多い。新聞やテレビなどの取材も頻繁にやってくるため、ほとんどの住民はカメラ慣れして取材に応じている。

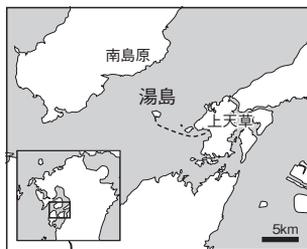
イターンというと、自分のように、とかく都会などから島へ移住してくるケースを考えがちだが、島の男性と結婚

し、嫁いで来た女性たちも広い意味でのイターンと言えるのではないだろうか。島の青年団員などにかがったところ、湯島には一〇年間で五〜六人程度、嫁いで来られる方がいるという。

今回は、四〇年以上前に島に嫁ぎ、子育てもひと段落した後、一念発起し食堂「ひといき処はんどまり 南風泊」を開業した松尾和枝さんを紹介したい。

一九歳で湯島へ嫁ぐ

松尾和枝さんは、千葉県九十九里浜のある比較的都市部の町に生まれ育った。一九歳の時に今のご主人と東京で出会った。ご主人は湯島生まれ湯島育ちで、当時は仕事のため東京に出ているという。一年ほど二人で東京で暮らしたが、



湯島：島原湾のほぼ中央に位置する面積0.52km²、周囲4km、人口324人(平成29年10月末現在)の島。島原の乱の主導者が集まって会議をしたことから談合島ともよばれる。亜熱帯植物のアコウ樹が群生し、漁業と花卉栽培が主産業。春から秋はタイの一本釣り客でにぎわう。



新たな観光スポットとなったハート型のアコウの木。

になった料理で鳥を訪れてくれるお客さんを喜ばせたいとの強い思いから、その空き家を改築し食堂を開くことを決意。ご主人は当初こそ反対したが、彼女の意志は固く、最

終的には開業を認めた。お客様に必ず「また来ます」と言
って帰っていただける食堂にしたい、という和枝さんの思
いに共感し、今ではご主人も、食堂のお客さんに新鮮な魚
を食べさせたいと、釣った魚を生きたまま店に届けてい
る。また、漁師として一本立ちした息子たちも必要な魚を
持ってきてくれるという。

メニューは「おまかせ定食」のみ

食堂「ひといき処 南風泊」は、平成二六年五月一日に
開業。この店の特徴は新鮮な食材で、基本的に、ほとんど
生きたままである。皿に盛られた刺身は、まだ尻尾がピ
クピク動いている。時期にもよるが、ウニなども生きたま
ま出てきて、客自身が殻を割りプルプルの身を掬って食べ
る。地元の方々は「産直数分」と話すが、まさにその言葉
がぴったりだ。このほかアラ出汁の味噌汁やタコご飯、幻
の大根として有名になった湯島大根のステーキや煮大根、
島イモ、メカブ、ヒジキなど、島の食材がふんだんに使わ
れたとても豪華な料理を楽しめる。

和枝さん自身も直々に釣り竿を持ち、よくアジを釣って
持ち帰る。ある常連さんは「本当の天然ものの料理は、こ
こでしか味わえない。隣の宮崎県から二カ月に一回は必ず
訪ねている」と話す。

「おまかせ定食 二二〇〇円」。食堂にはメニューが一つし



平成29年9月26日のおまかせ定食。

かない。その時獲れたものを提供するため、毎日メニューが変わるからだ。「いつも島にある物だけでごめんね〜」と笑う和枝さん。来店する際はできるだけ前日予約をお願いしたいとのことだが、飛び入りの方にも食材がある限り対応していきたいと話す。

お客さんと一緒につくる店

「ただいま」と客が来店し、「おかえり」と女将さんが迎える。この店ではよく見る光景だ。和枝さんに知り合いなのかと聞くと、以前一度だけ来店した人だと言う。そんなお客さんであっても、さも古くからの友人であるかのよう

に談笑がはじまる。「実家に帰ったみたい」「おばあちゃんに来たみたい」と、店の雰囲気懐かしむように見回すお客さんも多いという。常連ともなると、女将は忙しいだろうからと、自分でお茶を準備して飲んでいる。

店内は、台所と一〇人ほどがやっと入る客間のみ。壁には大物の魚拓や漁の写真が貼られ、天井からはビン玉と呼ばれる浮き具のガラス製のボールがロープに編まれて垂れ下がっている。棚には七色に輝くアワビの貝殻やリピーター客のメッセージボードも置かれ、漁師ならではの手づくり装飾品が随所に並んでいる。これらは「自前もあるけど、お客さんが持って来て置いていってくれる」そうだ。応援メッセージが入った看板や手描きの絵、天井に吊られた味のあるランタンも、常連さんがおもてなしのお礼としてプレゼントしてくれたものである。

このようなお客さんの支援もあって、開業時の資金はかなり抑えられた。大がかりな工事は、空き家の土間に板を張って客間にした程度。あとは元々あるものに手を加え、道具も徐々に揃えていったという。

島にも、店にもまた来てほしい

島で食堂を経営していく上で一番大切にしていることを尋ねた。

「儲けは考えずに自分が楽しみながらやっている。せっか



アットホームな店内。

顧客が増えている。最近では猫を見に来る若いカップルも多く、若者の人生相談にまで乗ることもある。上天草市の地域おこし協力隊として湯島に移住した筆者にとっても、和枝さんは島のお母さんのような存在だ。私の島暮らしを心配する両親に「私

く島に来てくれたのだから、美味しいものを食べて喜んで帰ってほしい。手を抜いてお客さんに悪い印象を与えてしまったら、二度と島に来てくれない。島にも、店にもまた遊びに来てほしいから続けている。また、お喋りが大好きなので、来店したお客さんには必ず『どこから来たか?』と、話しかけてしまう』と答えてくれた。

食堂は、特に宣伝などをしていないが、口コミでどんど

が世話を見るから心配しなくていい」と話し、安心させてくれたこともある。和枝さん曰く、「こうやって人と深くコミュニケーションをとっていると、余計に美味しいものを食べさせてあげたくなる」という。

これからも体が動く限り店を続けたいという和枝さん。お客様が必ず「また来ます」と言って帰っていく食堂が、湯島の交流の幅を広げている。

和枝さんのほかにも、平成一三年にUターンした湯島唯一の海女さん・姫野千月^{ちづき}さんが同二六年に「海女ちゃん食堂乙姫屋」を開業するなど、湯島では新たな動きが見られる。同二九年に新設された農海産物加工場での大根やワカメを使った特産品開発に向けた取り組みも注目だ。



荅 和宏 (つほみ かずひろ)

1984年生まれ、熊本県合志市出身。元JA職員。2017年1月から熊本県上天草市の地域おこし協力隊として湯島に移住。活動は主に農業、観光、加工品開発、情報発信など。

島からのメッセージ

●地域の活性化を牽引する小さな食堂

湯島には、天草・島原の乱の時代にキリシタンの作戦会議を行ったという歴史があり、別名「談合島」と呼ばれていた。面積わずか0.52km²、周囲約4km、人口300人で本土からの交通アクセスは、約25分かけての1日5往復の定期船に頼っている。航路は、人、郵便・宅配便、食品、日常物資、医療品などを運ぶ重要な役割を担っている。

島の産業は漁業、農業、サービス業などで、生産人口は3割程度、あとは高齢者である。全国的な少子高齢化の流れの中でも、湯島は特に人口減少が著しい。したがって、島の生産量は、極めて少なく、地域の活力向上までにはいたっていない。生産物は、タイ、ウニ、ワカメ、大根、カライモなどがあり、特に大根は「湯島大根」として有名になっている。また近ごろではワカメも近隣を中心に好評を得ている。

観光客も時代とともに減少していたが、最近では、島の猫が注目され回復傾向にある。しかしながら、その受け入れ体制は十分とは言えない状況で、以前からの旅館などサービス業従事者の高齢化が地域の課題のひとつであった。

そこで、松尾和枝さんが「なんとか役に立つかもしれない」と、空き家を改装した小さな食堂「ひといき処 南風泊」を始められた。地元でとれた新鮮な魚介類をそのまま料理してくれる「産直数分」の店である。観光客、釣り人が喜ぶことは、地域にとっても嬉しいことだ。島の観光産業全体としてみると、ほんの一部

に過ぎないかもしれないが、できることから進めていくことが重要。島の自然の産物を活用した小さな食堂を地域全体で応援したい。

「島を訪れる観光客や釣り人の皆さんが『今日の昼飯は、うまかったよ』と言って帰る。それが一番嬉しいんですよ」と、松尾さんは話す。島の活性化はこんな些細な事から始まるのかもしれない。お客様の立場になり、何が求められているのか、地域全体として取り組んでいく事が大事だ。

観光施設の充実もまだまだ不十分で、公的援助も必要としている、そこに住む一人ひとりの力はたかが知れているが、声をあげることが大切だ。島の美化、景観の保持、施設整備など取り組みに限りはないが、そこに住んでる人たちの「何か地域の役に、人の役に立つ事はないか」という思いが何よりも重要である。また、リーダーの育成も今後の大きな課題となろう。人間力不足では、何事も進まない。

全国的に高齢化が進んでおり、湯島を訪れる方も比較的高齢者が多い。彼らはそう多くを求めているわけではない。島に降り立てば寄ってくる猫たち、遙か水平線に沈んでいく夕陽、素朴で自然な食べ物……。ぜひゆっくり、ほんやりと島の時間を過ごしてほしい。車の騒音も、行き交う人もない時、自分の歩みを振り返るのもまた一考かもしれない。そのあとは、島の小さな食堂によって新鮮な魚でも。

(湯島区長 渡辺 均)